
土地分類基本調査

上野原・五日市

5万分の1

国 土 調 査

山 梨 県

1 9 8 8

序 文

本県では、新総合福祉計画の下、地域の活性化と県民のうらおいある生活を目指し、各地で土地基盤の整備や県土の有効利用を図る事業を実施しております。

土地分類基本調査は、このような土地の開発、保全及び防災等の基礎資料とするため、県土の実態を科学的且つ総合的に調査するものです。その成果は、土地の基本的性格である地形、地質、土壤、傾斜区分、水系・谷密度、土地利用現況の6図幅及び説明書によって構成されております。

今回調査の「上野原・五日市」地域は、国土地理院発行5万分の1地形図のうち、山梨県の県域を対象としたものです。

成果は、本年度も昨年に引き続き、印刷についてコンピューター・マッピング方式を採用いたしました。これにより、この成果が行政機関、教育機関を始め、より多くの人々に利活用されることを希望しております。

終わりに、本調査の実施に際し、御指導、御協力をいただいた関係各位に深く感謝の意を表します。

昭和63年3月

山梨県農務部長

堀 越 孝 良

目 次

序 文

ま え が き

総 論

- I 位置、行政区画および面積…………… 1
- II 人口および世帯数…………… 4
- III 地域の特性…………… 6
- IV 主要産業の概要……………11

各 論

- I 地形分類図……………15
- II 表層地質図……………22
- III 土 壌 図……………26
- IV 傾斜区分図……………29
- V 水系・谷密度図……………30
- VI 土地利用現況図……………31

資 料

- コンピューター・マッピングについて……………32
- 土地分類基本調査における面積測定……………33
について

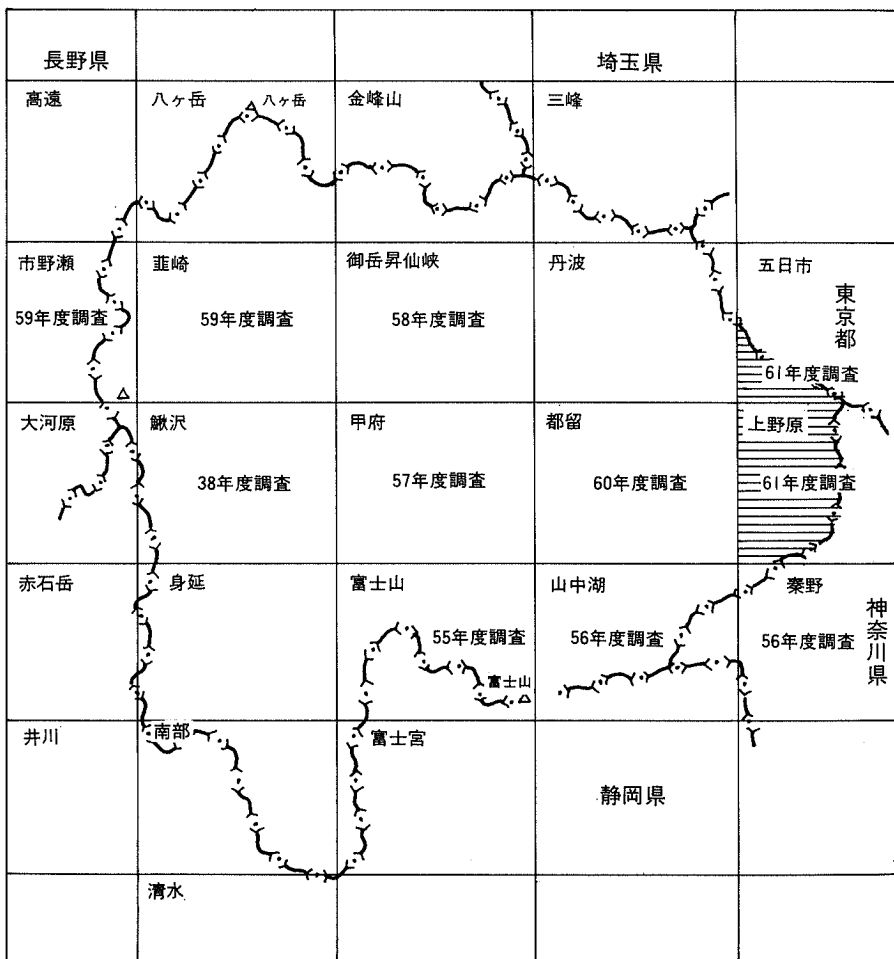
ま え が き

1. 本調査は、国土調査法（昭和26年法律第180号）第5条第4項の規定により、国土調査の指定を受け、国土庁土地局国土調査課の指導の下に、山梨県が事業主体になり実施したものである。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿である。
3. 調査項目、成果の作成機関及び担当者は、下記のとおりである。

調査項目	作成機関	担当者
地形分類調査 標高・傾斜区分調査 水系・谷密度調査	山梨大学教育学部 "	教授 吉村 稔 助教授 平川 一臣
表層地質調査	山梨学院大学 大月短期大学 山梨大学教育学部 宝石美術専門学校 山梨学院大学	教授 浜野 一彦 " 田中 収 助教授 角田 謙朗 " 服部 清二 講師 河西 秀夫
土 壤 調 査	山梨県総合農業試験場 " 山梨県林業技術センター " " "	場 長 田中 建男 主任研究員 日向 進 所 長 熊谷 喜孝 主任研究員 馬場 勝馬 研 究 員 清藤 城宏 技 師 田中 格
土地利用現況調査	山梨県農務部農村整備課 (61年度)	副 主 査 近藤 弘 主 事 手塚 昭夫
総 括	山梨県農務部農村整備課	課 長 山本 高德 主 査 有泉 大 副 主 査 近藤 弘 主 事 手塚 昭夫

総論

第1図 位置図



I 位置，行政区画および面積

1. 位置

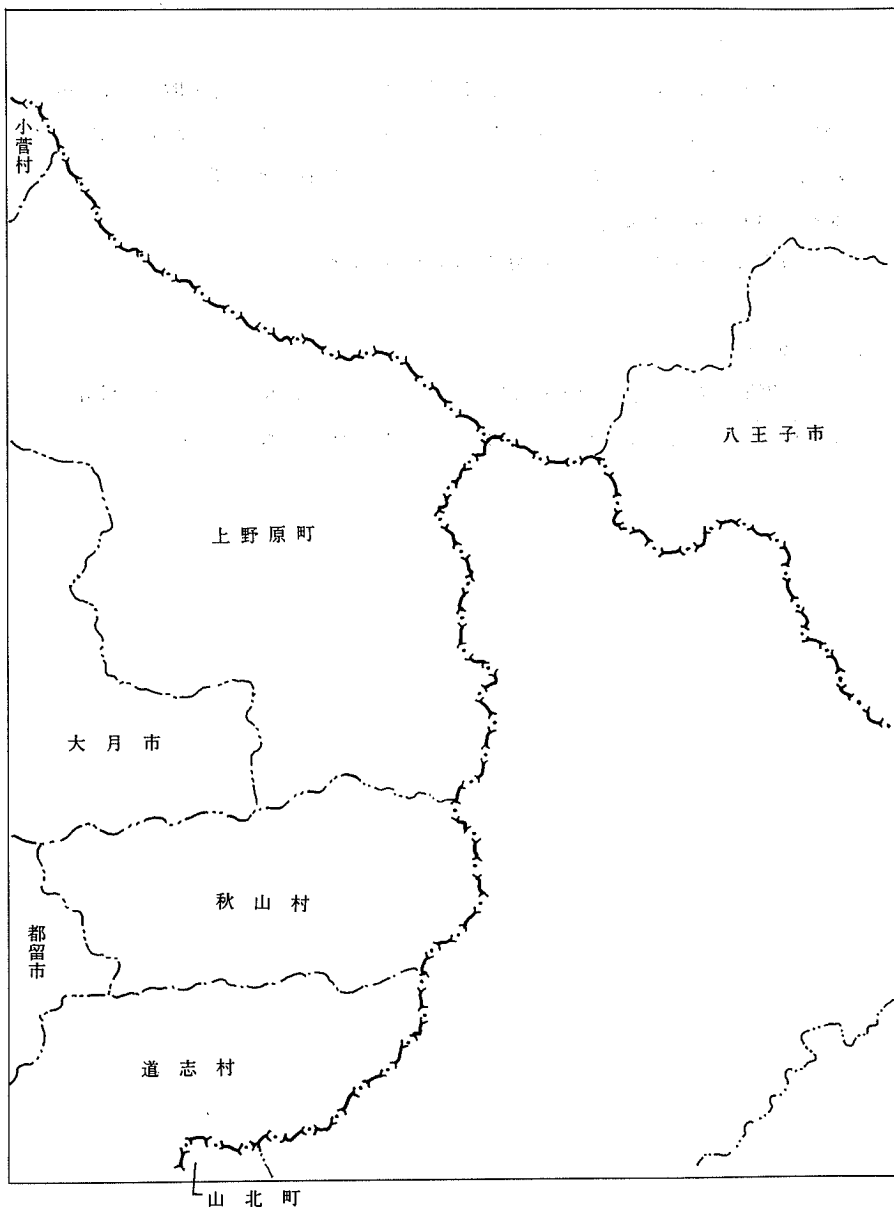
「上野原・五日市」図幅は，山梨県東部に位置し，「上野原」図幅，「五日市」図幅ともに神奈川県北西部，東京都西部を含む。経緯度は，「上野原」図幅が東経 $139^{\circ}0' \sim 139^{\circ}15'$ ，北緯 $35^{\circ}30' \sim 35^{\circ}40'$ ，「五日市」図幅が東経 $139^{\circ}0' \sim 139^{\circ}15'$ ，北緯 $35^{\circ}40' \sim 35^{\circ}50'$ である。

本調査は，両図幅のうち，山梨県の部分を対象とした。

2. 行政区画

「上野原・五日市」図幅の行政区画は，第2図のとおりで，大月市，都留市，上野原町，秋山村，小菅村，道志村の2市1町3村から成っている。

第2図 行政区画



3. 面 積

本調査対象区域内の市町村の行政区画面積及び図幅内面積は、第1表のとおりである。

第1表 面 積

市 町 村	図幅内面積		市町村面積		占有率 A / B (%)
	面積(km ²) A	構成(%)	面積(km ²) B	構成(%)	
大 月 市	35.07	14.2	280.61	37.8	12.5
都 留 市	8.33	3.4	161.97	21.8	5.1
上野原町	117.94	47.7	124.11	16.7	95.0
秋 山 村	44.79	18.1	44.79	6.0	1.0
道 志 村	38.69	15.6	79.35	10.7	48.8
小 菅 村	2.49	1.0	51.96	7.0	4.8
計	247.31	100.0	742.79	100.0	33.3

資料：建設省国土地理院「昭和61年度全国都道府県市区町村別面積調」による。

但し、図幅内面積は、コンピューター・マッピングによる面積測定の結果に基づいた数値である。

II 人口および世帯数

1. 人 口

この地域は、桂川及びその支流流域に人口が集中し、南北の山村では人口は希薄である。

桂川沿いの人口集中地域は東京都に近く、中央自動車道や中央線など交通の便に恵まれているため、都市のベッドタウン化する傾向にあり、今後も人口の増加が見込まれる。

周辺の山村地域は基幹となる産業に乏しく人口の流出傾向にあるため、行政が主体となって山村振興対策事業などを実施し、地域の活性化、流出傾向の歯止めを努めており、秋山村では昭和55年度を境にして人口が増加に転じている。

2. 世 帯 数

図幅内の全ての市町村において世帯数は増加する傾向にある。これは、核家族化の進行に伴う既存世帯からの分離という全国レベルの現象によるものであるが、特に大月市、都留市、上野原町などの都市部での増加が著しい。

一世帯当たりの人員は、約3.5人で、県平均の3.4人を僅かに上回っている。

第2表 人口および世帯数

市町村	昭和55年				昭和60年				増			減		人口伸比率 B/A	
	人口(男)	人口(女)	計(A)	世帯数	人口(男)	人口(女)	計(B)	世帯数	人口(男)	人口(女)	計	世帯数			
大月市	17,069	18,335	35,404	9,346	16,897	18,017	34,914	9,672	- 172	- 318	- 490	326	0.99		
都留市	15,954	16,947	32,901	10,034	16,113	17,045	33,158	10,466	159	98	257	432	1.01		
上野原町	12,586	12,946	25,532	6,582	12,529	12,803	25,332	6,784	- 57	- 143	- 200	202	0.99		
秋山村	1,218	1,128	2,346	555	1,274	1,166	2,440	614	56	38	94	59	1.04		
道志村	1,115	1,116	2,231	531	1,067	1,074	2,141	535	- 48	- 42	- 90	4	0.96		
小菅村	646	638	1,284	374	603	624	1,227	377	- 43	- 14	- 57	3	0.96		
計	48,588	51,110	99,698	27,422	48,483	50,729	99,212	28,448	- 105	- 381	- 486	1,026	1.00		

資料：昭和55年度国勢調査
昭和60年度国勢調査

Ⅲ 地 域 の 特 性

本地域は、山梨県東部に位置し、図幅の中央を山中湖を源流とする桂川が流れ、相模湾へ注いでいる。この桂川・鶴川・その支流の仲間川の沿岸には典型的な河岸段丘が発達し、集落や耕地などの生活舞台は段丘面に集中している。特に、上野原町では河岸段丘周辺に大規模住宅地の建設が計画され、ここは、首都圏に近く、交通条件も良いため、飛躍的な発展が期待されている。また、図幅南部の秋山村、道志村においても、周囲を山に囲まれる形で中央を秋山川、道志川が流れ、小規模な生活圏を形成している。なお、この地域は、住民の平均寿命が高く、特に上野原町の桐原地域は、日本一の長寿地域として知られている。

川沿いの生活圏の周囲には、赤鞍岳、扇山、権原山等、800m～1,300m級の山が連なり、秋山村、道志村、小菅村では周囲との交流を阻む要因となっていた。他方、木材資源の重要な供給地であり、水資源の貯蔵場所としての役割も果たしている。また、近年は自然資源としての価値も注目されている。

1. 気 象

本県は、周囲を高峰な山岳に囲まれているため、冬は寒さが厳しく、夏は気温が高く、典型的な内陸気候である。また、降雨量は比較的少なく、全体として乾燥した気候である。

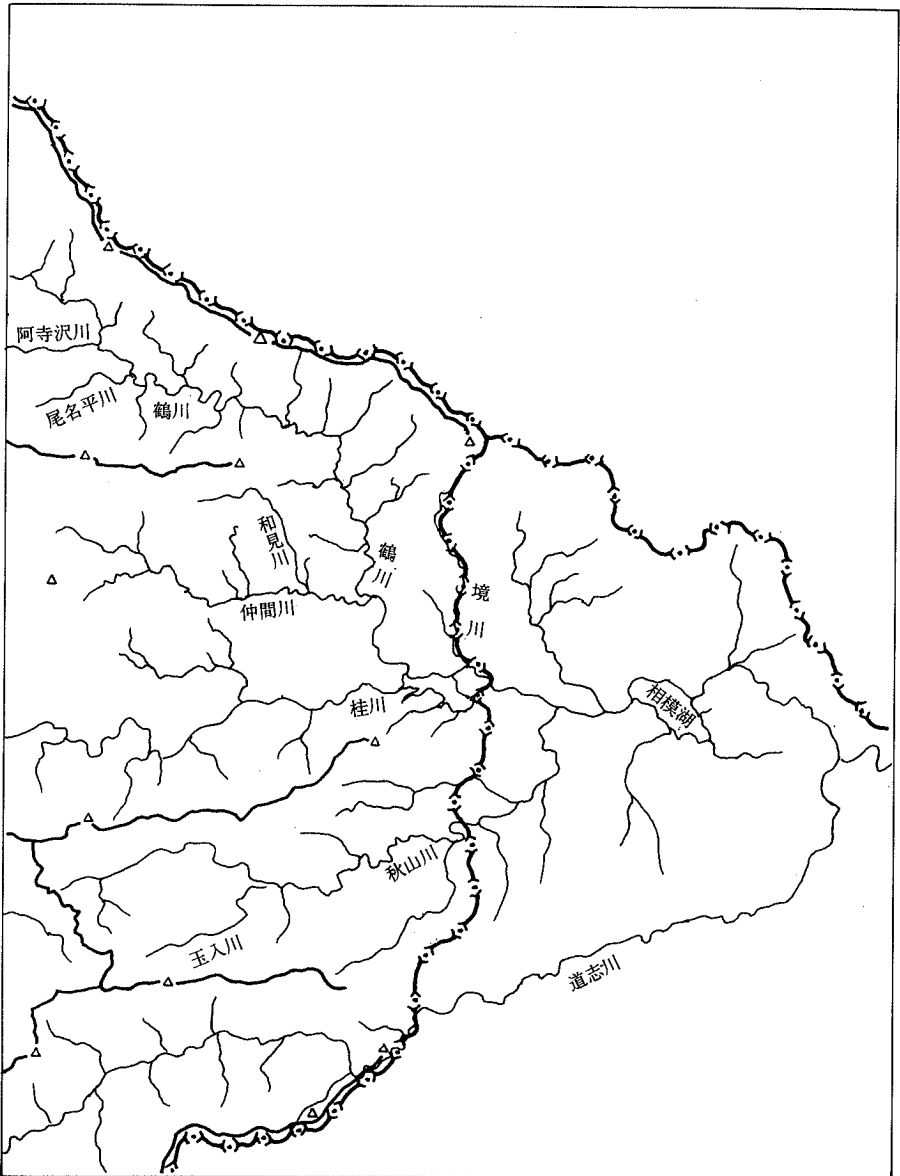
本地域のうち、北部は平温多雨地帯で針葉樹林の成育に適しており、また、南部は、比較的夏は涼しく、冬は暖かく、過ごしやすい気候である。

第3表 甲府気候表(1931～1960年)

要 素	単位	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全 年
気圧(現地の値)	mb	982.4	983.1	982.3	981.9	979.9	977.2	977.2	978.5	981.0	984.8	986.4	984.7	981.6
平均気温	℃	1.5	2.7	6.8	12.2	19.6	21.0	25.2	25.6	21.7	15.2	9.5	3.9	13.5
最高気温(平均)	℃	8.6	9.7	14.0	19.5	24.0	27.1	30.9	31.8	27.5	21.7	16.5	11.1	20.2
最低気温(平均)	℃	-4.3	-3.2	0.6	5.9	10.8	16.4	21.4	21.6	17.7	10.4	3.9	-1.8	8.3
平均降水量	mm	37.9	48.9	71.9	85.2	89.9	139.6	142.7	155.9	188.1	136.6	67.3	43.2	1,207.3
平均・風速	m/s	2.9	2.8	3.4	3.0	2.4	2.2	2.1	1.8	1.8	1.7	1.8	2.4	2.4

(甲府地方気象台)

第3図 主な尾根と河川図



2. 就業者数

農業を主要産業とした山間の3村も経営耕地面積は狭く、農業のみで生計を維持していくことは困難であり、また、林業も低迷しているため、第1次産業に従事する者の割合は減少している。

代わって、山村での観光事業の活発化や上野原町のベッドタウン化に伴う東京への通勤者の増加により第3次産業への就業者数が伸びている。

第4表 就業者数（昭和60年度国勢調査）

市町村	総数 (人)	第1次産業		第2次産業		第3次産業		分類不能産業	
		実数 (人)	構成比 (%)	実数 (人)	構成比 (%)	実数 (人)	構成比 (%)	実数 (人)	構成比 (%)
大月市	15,759	733	4.7	7,126	45.2	7,875	50.0	25	0.1
都留市	15,123	588	3.9	7,335	48.5	7,192	47.6	8	0
上野原町	11,818	617	5.2	5,815	49.2	5,382	45.6	4	0
秋山村	1,202	74	6.1	698	58.1	430	35.8	—	0
道志村	1,056	114	10.8	557	52.7	384	36.4	1	0.1
小菅村	634	125	19.7	304	48.0	205	32.3	—	0
計	45,592	2,251	4.9	21,835	47.9	21,468	47.1	38	0.1

3. 交 通

徳川幕府の時代から、上野原は江戸—甲府間をつなぐ甲州街道の重要な宿場町として栄え、この交通条件の良さから「甲斐絹」と呼ばれる特産品の絹織物が生まれた。

明治34年の国鉄中央線の開通後は、宿場町としての繁栄は終わったが、その後も、国道20号線の開通、中央自動車道路の建設など、交通環境の変化がこの地域の産業・文化の発展に重要な影響を与えている。

現在は、図幅の中央を東西に国鉄中央線が走り、この中央線とほぼ平行して中央自動車道と甲州街道（国道20号線）が走っている。

また、道志川に沿って国道413号線が走り神奈川県と連絡し、秋山川に沿って県道四日市場・上野原線が走っている。

鉄 道 ① JR東日本鉄道中央線

高 速 道 <1> 中央自動車道

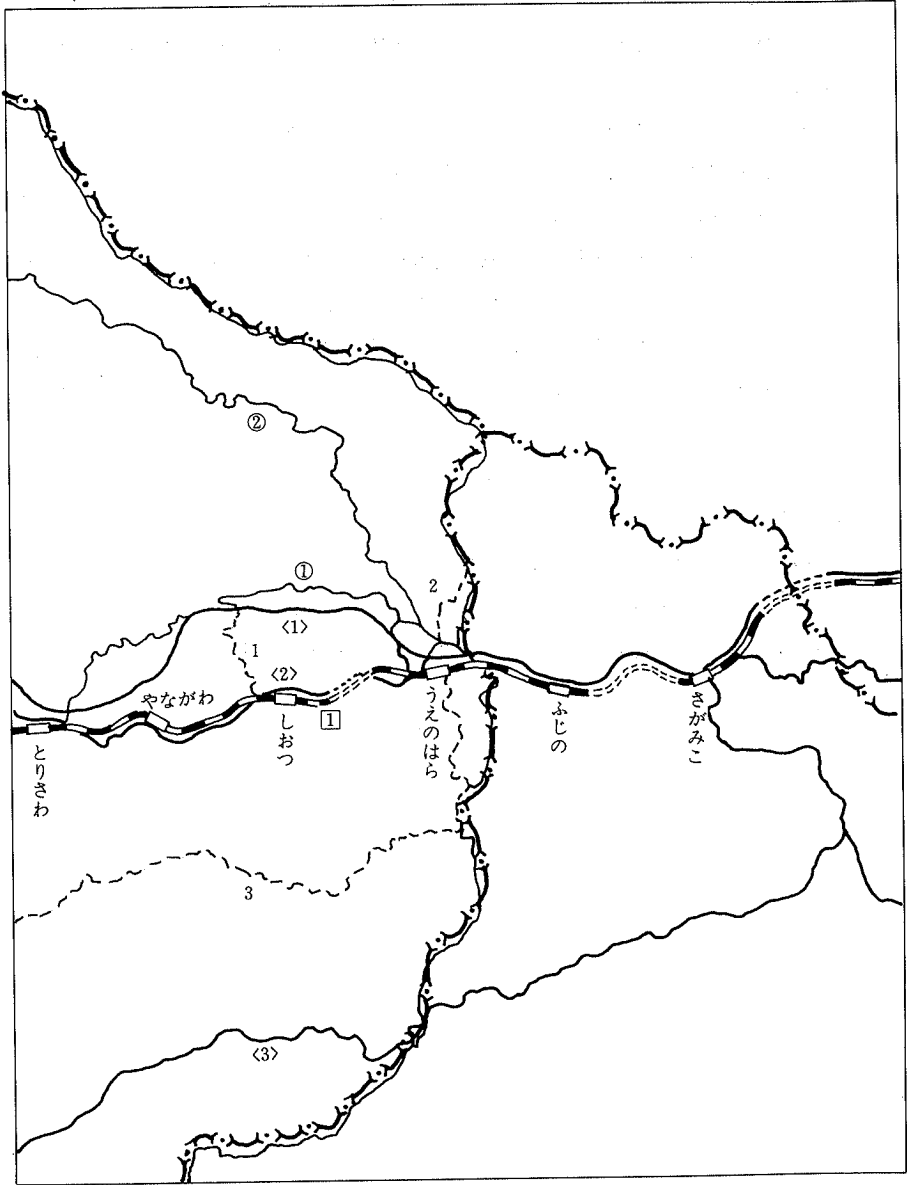
一 般 国 道 <2> 20号線 <3> 413号線

主要地方道 ① 大月・上野原線 ② 上野原・丹波山線

一般地方道 1. 野田尻・四方津停車場線 2. 佐野川・上野原線

3. 四日市場・上野原線

第4図 交通網図



IV 主要産業の概要

1. 林業

本地域の大半は林野で占められているが、ここは、山地の傾斜がきつく、材木の切りだし等の作業条件に厳しい面があるが、反面、比較的降雨量が多く、土壌条件にも恵まれているため、林業は、昔から重要な基幹産業の一つであった。しかし、社会経済情勢の変化の中で、労働力の不足、外材・代替材の進出、価格の低迷といった問題等により、林業経営は難しくなっている。このため、林道や作業道路の開設・改良、適切な間伐、後継者の育成、協同運営の推進などにより、林業生産基盤の整備、経営の安定化を目指している。

この他、若干ではあるがしいたけやわさびなどの特用林産物も生産されている。

また、豊かな森林資源は、東京都や神奈川県の子校の林間学校の場所としても活用されている。

2. 農業

桂川沿いの河岸段丘では、米や野菜などが生産されているが、経営面積は小さく、自給自作の農業であり、農業のみで生計を営んでいる者は少ない。

養蚕業は、かつてはこの地域の農業の中心的役割を果たしていたが、繭価の低迷、近代化施設の立ち遅れなどのため停滞している。

畜産経営は、乳牛・ブロイラー経営ともに、昭和40年頃は小規模経営農家が大半を占めていたが、次第にこれらの農家は淘汰され、現在は専門化した大規模経営農家のみが残り、その経営も難しくなっている。

周辺の山村では、僅かな耕地を利用して米、桑、とうもろこしが作られ、また、ゆるい傾斜地ではコンニャクが生産されている。しかし、生産量は少なく、兼業農家が大半である。なお、農業従事者の高齢化も深刻な問題となっている。

近年は、清流を利用してのわさび栽培やニジマス、ヤマメの養殖など、自然条件を生かし、観光業と結び付いた農業への志向も見受けられる。

3. 工業

上野原町では、江戸時代の頃から絹織物の生産が盛んで、工業も繊維工業が中心であったが、近年は、繊維工業は減少し、代わってプラスチック成型加工工業

や機械金属工業が伸びている。

周辺の山村は、近年まで余り工業には関心がなかったが、産業の発展と若年層の定着を狙って工場の誘地が行われている。しかし、零細な下請け工業が多く、製造品出荷額は伸び悩んでいる。

4. 観 光 業

道志村，秋山村，小菅村では，かつて主産業であった農林業に代わって，恵まれた自然と首都圏に近いという立地条件を生かした観光業が基幹産業と成りつつある。各村とも，澄んだ空気や清らかな水，野山の山菜や清流のアユ・ヤマメなどの生のままの自然の他に，観光農園やキャンプ場など，自然と触れあい，自然を楽しむ施設を作ったり，テニス，ゴルフなどのレクリエーション施設を整備して観光客の獲得を目指しており，着実に成果をおさめている。

また，農業や林業などの他の産業も観光業と結び付く形で活性化を図り，村全体が明るく活気に満ちた「ふるさとづくり」を推進している。

第5表 農家戸数及び耕地面積

区分 市町村名	農家戸数(戸)		耕地面積(ha)			耕地率 (%)	林野面積 (ha)
	専業	兼業 合計	兼業率	普通畑	樹園地 牧草地		
大月市	148	1,872	92.7	193	249	2.3	24,742
都留市	90	1,901	95.5	91	113	4.0	13,902
上野原町	139	1,689	92.4	253	147	4.4	10,472
秋山村	6	390	98.5	39	14	2.0	4,201
道志村	8	372	97.9	51	13	1.7	7,446
小菅村	16	196	92.5	31	4	0.9	5,020
計	407	6,420	94.0	658	540	2.9	65,783

資料：山梨県農林水産統計年報(昭和61年度版)

第6表 農業粗生産額

単位：百万円

区分 市町村名	農業粗 生産額		耕種					畜産				加工 農産物	
	計	米	麦 雑豆	いも類 穀及び 野菜	果 実 花 き	その他	養蚕	計	肉用牛	乳用牛	豚	鶏	その他
大月市	823	187	23	216	37	12	157	191	2	106	64	15	4
都留市	1,042	431	16	300	21	6	73	195	16	4	96	69	10
上野原町	923	117	23	251	25	14	63	430	—	332	2	95	1
秋山村	91	18	7	55	1	5	4	1	1	—	—	0	—
道志村	401	44	5	89	1	9	1	252	—	—	252	—	—
小菅村	210	—	2	187	15	6	—	—	—	—	—	—	—
計	3,490	2,123	76	1,098	100	52	298	1,069	19	442	414	179	15

資料：山梨県農林水産統計年報(昭和61年度版)

第 8 表 工業統計及び商業統計

単位：人，百万円

区分 市町村名	事業所数	従業員数	製 造 品 出 荷 額	商 店 数	従業員数	年 間 販 売 額
大 月 市	219	3,235	3,428,192	623	2,346	3,837,599
都 留 市	284	4,628	5,836,271	610	2,083	4,490,547
上 野 原 町	180	3,223	5,865,756	396	1,335	1,800,207
秋 山 村	24	258	189,514	34	53	47,898
道 志 村	25	272	178,957	29	50	50,384
小 菅 村	8	135	91,586	24	43	54,675
計	740	11,751	15,590,276	1,716	5,910	10,281,310

資料：昭和60年工業統計調査結果報告（山梨県）

昭和60年商業統計調査結果報告（山梨県）

(注) 「事業所数」・「従業員数」・「製造品出荷額」は4人以上の事業所である。

各 論

I 地形分類図

1. 地形概説

調査地域は関東山地（奥多摩山地）南縁部と丹沢山地北東部およびそれらが接する地域にあたり、大半は山地急斜面から成る。山地を流れる桂川（相模川）とその支流の道志川、秋山川、鶴川などの谷は峡谷状をなし、谷底部の平坦地の発達が悪い。しかし、河谷には河成段丘および山地の小支流堆積物より成る急勾配の扇状地性の地形が標識的に発達する。

山地は、巨視的には桂川の谷、より詳しく見れば扇山南麓に一致するいわゆる藤野木—愛川線を境にして、北側が関東山地、南側が丹沢山地である。関東山地は調査地域内では主として古第三系・瀬戸川層群、三倉層群より成り、北部に白亜系が露出する。これらはおおよそWNW—ESE方向に帯状に配列するが、山地の地形への影響は大きくない。しかし、鶴川のNW—SE方向の直線的な河谷は、いわゆる鶴川断層に一致し、地質構造に支配されている。

丹沢山地には、第三系中新統～鮮新統の御坂層群および富士川層群相当層がほぼすべての地域に分布する。これらの地層は断層変位が著しいが、大局的には南から北へ上位の地層が見られる。道志川および秋山川の河谷の位置は、これらの地層境界ないし断層に支配されていることが多い。このため、調査図幅内の丹沢山地の主稜線と主要河谷の方向はほぼWSW—ENE方向に平行する。

調査地域は北端部が多摩川に排水されるのを除いて全て相模川水系をなす。地形分類図ではこの他に道志川水系、秋山川水系、鶴川水系、葛野川水系（都留図幅）および桂川上流の水系がわかるように分水界を表示した。

2. 地形区

主として空中写真判読により地形分類を行った。その分類図に基づき、地形の連続性、構成物質、地形の勾配とそれらの影響を受ける土地利用、形成に関与した作用などを考え併せて次のような地形地域を設定した。低地・台地の境界は著しく入り組んでいたり、小範囲であったりするので、地形地域区分図（地形分類図の附図）は必ずしも地形分類図に忠実ではなく省略が含まれている。

I 山地	a 丹沢山地	1. 大室山山地 2. 道志・秋山山地 3. 御前山山地
	b 関東山地	1. 扇山山地 2. 陣馬山地
II 低地	a 河谷低地 台地	1. 桂川上流河谷 2. 道志川河谷 3. 秋山川河谷 4. 桂川河谷 5. 鶴川河谷 6. 扇山南麓緩傾斜地

3. 地形詳説

I 山地

山地の分類は、斜面の勾配に基づいている。分級は15°未満、15°～30°、30°～40°、40°以上である。これらは図上では茶色の濃（急傾斜地）・淡（緩傾斜地）により表現される。これらをベースにして、顕著な平坦面・凸型斜面および凹型斜面をそれぞれ赤および青のハッチで重ねた。また、相対的に大規模な山地崩壊に伴う崩落崖を重ねて表現した。しかし、崩落（土石流）起源の谷埋め地形、押し出し地形については、傾斜区分に基づく表現は省いた。

山地は相対的に大きな河谷およびそれらを結ぶ峠によって細分される。丹沢山地（I a）はほぼ扇山南麓の藤野木—愛川線以南、関東山地はそれ以北の山地である。丹沢山地はさらに道志川以南の大室山山地（I a1）、道志川～桂川本流間の道志・秋山山地（I a2）、桂川～扇山南麓の御前山山地（I a3）に、関東山地は鶴川以西、葛野川以东の扇山山地（I b1）、鶴川以东の陣馬山地（I b2）に細分される。

Ia 丹沢山地

丹沢山地主部に広く分布する石英閃緑岩の一部が図幅南西端に僅かにかかるほかは、大室山山地（Ia1）は御坂層群から成り、ここでは南北方向の断層に境されつつ、東ほど新しい地層が分布する。これらの地質、地質構造は、石英閃緑岩地域の山地斜面でやや緩勾配の範囲が広いという点以外には地形に直接表現されていない。大室山山頂から北へ延びる稜線にかけて、やや顕著な平坦面ないし凸型斜面が見られる。大室山山頂北側斜面には崩壊地がかなり密集し谷の中にも土石流性の堆積地形が発達する。

道志・秋山山地（Ia2）は、御坂層群上部（西八代累層～川口累層相当層）より成り、秋山川の中流部に石英閃緑岩が露出する。山地は秋山川～桂川間でやや低くなり、斜面勾配もやや緩い範囲が広がる。しかし、山地斜面の地形に大差はない。大きな差異はむしろ秋山川～道志川間には山地崩壊が多く認められるのに対し、秋山川～桂川間では極めて少なくなることである（地質、地質構造には大きな違いはない）。このことを反映して、秋山川～道志川間では新旧の土石流起源の堆積地形が複数箇所で見られる。特に「久保」集落北方巖道峠西方の崩壊は、やや規模が大きく崩落崖と崩落物質に埋められた谷地形を明瞭に残している。

扇山麓～道志川間の御前山山地（Ia3）は御坂層群最上部および富士川層群中部～上部より成る。このうち後者から成る地域は20°前後の勾配の範囲が広く他の山地と著しく異なる。後述のように（II a 6）、ここには段丘地形、開析されたやや規模の大きな支流性扇状地が分布し、やや丘陵的な地形を呈する範囲も広い。上述の地質の影響とともに、北側の関東山地と境する扇山断層の運動もこのような地形的差異を導いたのであろう。

Ib 関東山地

関東山地を構成するWNW—ESE方向に帯状に配列する古第三系～白亜系は、北から南へ順次新しい地層が現れる。調査地域より北方にはジュラ系～白亜系さらに二畳系が分布する。扇山南縁には小範囲に石英閃緑岩が露出する。鶴川より東側の陣馬山地（Ib2）でも、西側の扇山山地（Ib1）でも地質に制約された山地地形は見当たらない。むしろ、東京都あるいは神奈川県との境界

である陣馬山地主稜線付近では、山梨県側へは急斜面であるのに対し、北東側へは緩傾斜の稜線が多く、非対称山稜をなしていることが目立つ。

II 低地・台地

低地・台地については地形分類を重ねて地表面の傾斜を分級して黒の細線模様で示すことを試みてきた（「甲府」図幅など）。分級は 8° 以下の地域について $8^{\circ}\sim 3^{\circ}$ 、 $3^{\circ}\sim 1/2^{\circ}$ 、 $1/2^{\circ}\sim 1/4^{\circ}$ 、 $1/4^{\circ}$ 以下である。しかし、この調査図幅内では極めて小規模かつ分布も断片的であるため、上野原付近、鳥沢付近に限って図示した。

本図幅内には河谷の河成段丘、低地および支流の扇状地性緩傾斜地が発達する。

桂川上流河谷（IIa1）は西へ流れて桂川に合流する朝日川河谷最上流部にあたる。朝日川の谷は上流まで谷底部が比較的広い。

道志川河谷（IIa2）は道志村・竹之本付近より上流では支流性の土石流起源と推定される新・旧の沖積錐状の地形が発達するとともに、谷底部も多少とも認められる。これに対して、より下流では河成段丘が分布する一方で、谷底にはほとんど平坦地はなくなる。

秋山川河谷（IIa3）でも同様に下流部ほど河成段丘が発達する一方で、谷は峡谷状になる。このことは、上流では相対的に支流からの物質供給が多く、低地地形の発達には支流の作用に大きく支配されることを示す。支谷内の土石流起源堆積地形は上、下流とも認められることも上記の考えと矛盾しない。

桂川河谷（IIa4）は河成段丘の模式的な発達でよく知られている。相模川の流域には大きくみて4時期の河岸段丘が分布しているが、大月から上野原にかけてはそのうち、上から3段目および4段目（最下位）の段丘が広い。たとえば、上野原の広い段丘は3段目に、相模川の南の鶴川の段丘は4段目にあたる。しかし、これらの段丘面はさらに低い崖によって、それぞれ3段程度に細分される。4段目の段丘は猿橋付近では富士山から流れ下った猿橋熔岩流に覆われている。3段目の段丘のかなり広い範囲をコンクリート状に固結した、いわゆる「富士・相模川泥流」が覆っている。この泥流は雪氷に覆われた富士山の爆発によって発生したと考えられる総量 1km^3 に及ぶ大規模なもので、70km下流の相

模原でさえ厚さ1.5m近くある。当時の桂川―相模川の谷は、現在のように深い峡谷状ではなく、河成段丘面が当時の河床であったから、より広がった。しかし、高速で流下する泥流は多少の高度障壁も乗り越える。桂川の河谷には、このような物質が残されていること、富士山はまだ若い火山であることは記憶されていてよい事実である。

上から3段目の段丘のうち、最も高い部分には東京軽石層があるので約4～5万年前の河床であったことが知られる。また、上野原・諏訪付近の境川沿いで確認されるように、この河成段丘を作るのは厚い砂礫層で、かつての桂川の深い谷を埋め戻して発達している。この厚い砂礫層の中～下部には約8万年前の御岳第I軽石層（Pm-I）が挟まれていることから、埋められた谷底は1つ前の間氷期頃の谷底であり、最後の氷期の始まりとともに谷は砂礫で埋められて行ったことが復元される。

扇山南麓緩傾斜地（IIa6）には最高位の河成段丘が仲間川右岸の大櫛から荻野にかけて発達する。また、扇山の南斜面の支流は新旧の土石流扇状地を発達させている。これらの扇状地は河成段丘に連続し、少なくとも3つの時期に分かれて発達したらしい。

鶴川河谷（IIa5）については、本流よりも支流の仲間川沿いで河成段丘の発達が良い。本流沿いの棚原、西原など山間の集落は主として新旧の土石流性小扇状地上に立地している。

4. 起伏量

5万分の1地形図「上野原」、「五日市」図幅の各辺を20等分して得られる各メッシュについて、最高点と最低点の標高差を求め、これを起伏量とする。それらの値を50m未満、50～100m、100～200m、200～400m、400m以上の5階級に分け、小さい方からそれぞれ1、2、3、4、5の数字で表現して起伏量図とした。

起伏量はメッシュあたりの地形の急俊さの程度、平坦さの程度を表現する。平坦な土地が点在していても小規模で、メッシュの範囲内により高度の高い、或は低い場所が含まれる場合には起伏量は大きくなる。

起伏量が400m以上の地域が連続的に現れるのは丹沢・大室山山地、秋山川・道志川間の山地および鶴川河谷兩岸の山地（陣馬山地、扇山山地の北部）である。

秋山川河谷と桂川河谷を分ける山地では、400m以上の起伏量を示す範囲は狭く断片的になる。これらの相対的に起伏量が高い地域を分断しているのは、道志川、秋山川、桂川、鶴川の各河谷である。しかし、これらの河谷部でも桂川沿いを除けばほぼ全て次の分級単位・200～400mの起伏量を示し、山地斜面は急傾斜で河谷に臨み、谷底部の平坦地は著しく狭いことを示している。

起伏量3で示される100～200mの連続する地域は河岸段丘の発達がよい桂川の現河谷に必ずしも一致しない。むしろ、関東山地と丹沢山地の境界をなす扇山山麓に沿っていると見るべきである。河成段丘の模式的発達地である上野原付近でさえ、本図のメッシュ間隔では識別されない。

起伏量が50～100mの地域は僅かに鳥沢および上野原付近の桂川河谷がやや広い所、大柵付近の扇山山麓延長部でしかも段丘がやや広い所に見られるにすぎない。

(平川一臣, 吉村稔)

起伏量图

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
A	5										
B	5	5									
C	5	5									
D	5	5	4								
E	4	4	4								
F	4	4	5	5	4						
G	5	5	4	4	5	4	4				
H	5	5	4	4	5	5	5	5	4	4	
I	5	5	5	5	4	4	4	5	4	4	
J	5	5	5	4	5	5	4	4	4	5	5
K	5	5	5	5	4	5	4	4	4	4	4
L	4	4	4	5	4	4	4	4	4	4	
M	4	4	4	4	5	5	4	4	4	4	
N	5	5	5	4	5	4	3	3	4	3	3
O	5	5	4	4	3	3	3	2	2	3	3
P	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3
Q	3	3	3	3	3	3	4	4	4	2	3
R	2	3	4	4	4	4	4	4	4	4	3
S	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
T	5	5	5	4	4	5	4	4	4	3	4
U	4	5	4	4	4	4	4	4	4	3	3
V	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
W	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
X	5	4	5	4	4	4	4	4	4	4	4
Y	5	5	4	5	5	5	4	4	4	4	
Z	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	
A'	5	5	4	4	4	4	4	4	4	4	
B'	5	5	3	5	5	5	5	4	4		
C'	5	4	4	5	5	5	5	5			
D'	5	4	4	5	5	5	5				

1 : <50m 4 : 200m~400m
 2 : 50~100m 5 : >400m
 3 : 100m~200m

II 表層地質図

本図幅の北縁は秩父山地、南縁は丹沢山地である。東側は関東平野に面している。中央を富士山に源流を持つ桂川が東流する。

桂川より北側は秩父山地に連なる山地で、この山地の地質は先新第三紀層より構成されるため急峻な地形を示している。扇山 (1,137.8m) 権現山 (1,311.9m) が高峰であるが、一方関東平野に近づくにつれて標高は漸次低下し、地形も緩慢となり、図幅東端の向風山 (むかいかぜやま) では、標高 542.7m である。

桂川より南側では図幅の南縁近くを桂川に平行して道志川が東流するが、道志川西北区域は急峻な地形を示し、右岸では加入道山 (1,418.4m)、大室山 (1,587.6 m) が東西に連なる山地を造り、左岸では赤鞍ヶ岳 (1,299.0m) や阿天利山 (729.0 m) を中心として東西に山地が連なる。道志川の流路に平行するこれらの山地も、関東平野に近づくにつれて標高を減じて、標高 500~600m の山地となる。

道志川、桂川間の山地は高畑山 (987.9m)、倉岳山 (990.1m)、高枝山 (733.2 m)、で地形もやや緩慢である。地質は新第三紀層および第四紀層より構成される。

図幅の北側区域は先新第三紀四万十層群が露出し、中央部の桂川沿岸では河流中には新第三中新世御坂層群および鮮新世富士川層群が露出し、これを不整合に被覆して第四紀洪積世の湖成堆積物の砂層粘土層および土石流堆積物の角礫層が広範囲に露出する。図幅の西南区域には新第三期中新世の御坂層群が露出する。低山地区域には第四紀洪積世の土石流堆積物が厚く露出する。

河床には第四紀沖積世の河床堆積物の砂礫層が見られる。

I 未固結堆積物

I-1 沖積堆積物

図幅内の河川は桂川、道志川、鶴川である。この河川の河床には、沖積堆積物として砂礫層が見られる。その厚さは最大 30m に達するが平均 10m の厚さである。

I-2 扇状地堆積物

各河川には多数の支流があって合流地点には扇状地が見られることが多い。扇状地堆積物の厚さは最大 20m である。堆積物は砂礫である。

I - 3 段丘堆積物

桂川の両岸には段丘が見られ、2段に区分され、現河床よりの段丘面の高さは次のとおりである。

第1段丘面 30m

第2段丘面 5m

堆積物は砂礫よりなり、礫は円磨度が高く、その径は1m以上のものも多い。

II 半固結堆積物

II - 1 ローム層

各山地頂上部には、ローム層の堆積が見られる。層厚は薄いのが、堆積後に流出し、再堆積した二次堆積ローム層が見られる。

II - 2 湖成堆積物

河川流域地域には、砂層、粘土層の堆積が見られる。砂層は灰白色、中粒で、粘土層は凝灰質である。これを被覆して土石流堆積物の角礫層が広範囲に分布する。

II - 3 火山性堆積物

洪積世末期の古富士火山の噴火に伴って、火山泥流が桂川を流下し 四方津東方でも泥流堆積物が見られる。玄武岩質火山泥流で梁川付近でも厚さ5mに達する。

III 固結岩

図幅の北西部には四万十層群が、南西部に御坂層群、富士川層群が露出する。四万十層群の岩相は次のとおりである。

千枚岩岩・珪岩互層

千枚岩・硬質砂岩互層

千枚岩層

ホルンフェルス

御坂層群はグリーンタフ変動帯に属しその岩相層序は次のとおりである。

石英安山岩質溶岩流および同質凝灰角礫岩

砂岩・泥岩互層

玄武岩質溶岩流および同質凝灰角礫岩

IV 地質層序

第 四 紀	沖 積 世	河床堆積物 (砂礫層)
	洪積世末期	土石流堆積物 (角礫層), 古富士火山泥流 段丘堆積物 (砂礫層)
	中 期	湖成堆積物 (砂層, 粘土層) 段丘堆積物 (砂礫層)
第 三 紀	鮮 新 世	富士川層群 (礫岩, 砂岩)
	中 新 世	御坂層群 (石英安山岩, 砂岩泥岩互層, 玄武岩)
古第三紀～ 三疊紀		四万十層群 (千枚岩, 珪岩, 硬質砂岩)

V 温 泉

図幅内には高温の温泉は見られないが、鉱泉に属する泉温 25° 以下の温泉は湧出する。

VI 災 害

鶴川沿岸, 桂川沿岸には地すべり地がある。地すべりには, (1)表層地すべりと, (2)構造的な地すべりとがある。表層地すべりは桂川沿岸および北側の山地に見られ, 急傾斜地では表土の崩壊を伴っている。構造的な地すべりは藤の木愛川構造線に平行した区域に発生し, その発生は断層活動に関連している。

山崩れは全域に発生し, 特に土石流堆積地は軟弱で崩壊しやすい角礫層よりなるために, 急傾斜地では山崩れがしばしば発生する。

地震災害は桂川沿岸より丹沢山地にかけては地震多発地帯であって, 時には被害地震が発生する。最近では昭和51年6月14日 (M=5.8), 昭和58年8月8日 (M=6.1)に被害地震が発生し, 表層の一部破壊, 崖崩れ, 道路破損等があり, 震度5～6の被害が見られた。今後の地震災害が予想される地域である。

参 考 文 献

浜野一彦他（1970）：山梨県地質誌 山梨県

浜野一彦他（1972）：山梨県土地分類調査20万分の1表層地質図 山梨県

浜野一彦（1974）：甲府構造線および富士八ヶ岳構造線 山梨大学教育学部紀要

浜野一彦他（1981）：土地分類基本調査（山中湖）山梨県

浜野一彦他（1982）：土地分類基本調査（甲府）山梨県

（浜野一彦）

Ⅲ 土 壤 図

本地域に分布する土壤は山地及び丘陵地に黒ボク土及び褐色森林土が広く分布しているほか、一部には黄色土がある。台地には一部に黒ボク土及び黄色土があるが、大部分は褐色森林土であり、河川沿岸の低地には灰色低地土が点在している。

1. 黒ボク土壤

この土壤は、表層の厚さ、25cm以上50cm未満が黒色ないし黒褐色の腐植に富み、その下層は腐植含量の少ない褐色の火山灰土からなる土壤である。

これに属する大川口統は表層20～50cm程度まで腐植に富み、全層粘質土からなる。本図幅全域の山地斜面に分布し、主として普通畑、樹園等に利用されている。

2. 淡色黒ボク土壤

この土壤は火山灰土のうち腐植層が25cm以下と浅いもの、または全層腐植層の少ない土壤である。これに属する江木統は、腐植含量が比較的少ない黄褐色の粘質土である。桂川および鶴川の沿岸に点在する平坦地に分布し主として水田として利用されている。

3. 褐色森林土壤（赤褐色）

この土壤の色は灰褐が主で全般に腐植含量が少なく土性は強粘質のものが大部分である。これに属する岳辺田統は腐植を含み全層強粘質で角礫が存在する。この礫の有無により最上統と区別される。

岳辺田統は本図幅全域の山腹、山地斜面などに広く分布しているが、最上統は段丘および台地上の比較的平坦な地形に点在している。多くは桑園、普通畑として利用されているが、岳辺田統は急傾斜地が多く有効土層も浅いため、生産性は低い。

4. 黄色土壤

この土壤は腐植含量が少なく、下層土の色が黄～灰褐色を示す土壤である。土性は主に強粘質で礫を含まない。水田利用によるかんがい水の影響で斑紋が認められる。これに属する蓼沼統は腐植含量が少なく、全層強粘質であり、全層が粘質である江部乙統と区別される。両土壤とも桂川、秋山川等の河川流域の山間平坦部に褐色森林土と錯綜して分布し、その面積は比較的多く、大部分が水田とし

て利用されている。

5. 粗粒灰色低地土

この土壌は河成沖積低地に分布し、表層の土性は粘質～壤質であるが、下層は砂質～砂礫質となり、いずれも斑紋を有する土壌である。

これに属する八口統は腐植を欠く壤質で、腐植を含み粘質の松本統と区別される。両統とも下層は砂礫層となり、鋤床層には斑紋が顕著に認められる。

これらの統の本図幅内の分布は、道志川および鶴川流域の河成沖積低地に分布し、水田として利用されている。

山地及び丘陵地の土壌

1. 乾性褐色森林土壌

褐色森林土のなかのB_A、B_B、B_C型に相当する乾性型土壌で、分布は尾根筋や山腹上部である。A₀層は下層が主である。A層は黒褐色ないし暗褐色の色調で、B層との境は割合はっきりしている。土壌中に菌糸をみることがある。

これに属する統は上野原、大月、秋山、都留、及び道志の各々1統であり、主として天然広葉樹林、アカマツ人工林、ヒノキ人工林、及びカラマツ人工林として利用されている。

2. 褐色森林土壌

褐色森林土のB_D(d)、B_D型に相当する適潤型土壌である。分布域は山腹中部から山脚部にかけて広い。林地生産力もきわめて高い。A₀層はほとんどみられなく、A層は黒褐色で腐植に富んでおり、団粒状構造がよく発達している。層位は厚く、B層との境は判然としない。

これに属する統は上野原、大月、秋山、都留、及び道志の各々の統であり、主として、ヒノキ、アカマツ、スギ人工林として利用されている。

3. 湿性褐色森林土壌

褐色森林土のB_e、B_fに相当する湿性型土壌で、分布は沢沿いに小面積、帯状に出現する。A₀層はない。A層は黒褐色で黒味が強く、腐植に富んでいる。層位は厚く、B層との境は漸変である。層全体がやや過湿気味である。

これに属する統は上野原，大月，秋山，及び都留の各々3統で主にスギ，ヒノキ人工林として利用されている。

(日向 進，馬場勝馬)

IV 傾斜区分図

5万分の1地形図「上野原」「五日市」の山梨県内について、全ての等高線間隔に基づいて地表面の傾斜区分を行い図示した。傾斜分級は、 40° 以上、 $40^{\circ}\sim 30^{\circ}$ 、 $30^{\circ}\sim 20^{\circ}$ 、 $20^{\circ}\sim 15^{\circ}$ 、 $15^{\circ}\sim 8^{\circ}$ 、 $8^{\circ}\sim 3^{\circ}$ 、 3° 以下である。 3° 以下の範囲について、さらに2.5万分の1地形図により $3^{\circ}\sim 1/2^{\circ}$ 、 $1/2^{\circ}\sim 1/4^{\circ}$ 、 $1/4^{\circ}$ 以下に細分することを試みたが、図幅内にまとまった平坦地が狭く、 $3^{\circ}\sim 1/2^{\circ}$ の範囲を小範囲に認めることができるにすぎない。細分した範囲についてはオーバーレイシートの傾斜分布図には示さず、地形分類図上に黒細線で表現した。

山地斜面は $30^{\circ}\sim 40^{\circ}$ の急傾斜地の占める範囲が広い。 40° 以上の極急傾斜地は広くなく、連続性に欠ける。しかし、 40° の傾斜区分境界程度の勾配の山地斜面はかなりある。それらも図表現できるほど広くない。 $30^{\circ}\sim 20^{\circ}$ の山地斜面は道志川、秋山川、桂川、鶴川沿いに分布するが、 $30^{\circ}\sim 40^{\circ}$ の斜面との入り組みがかなり激しい。このことは、山腹から山麓へと徐々に勾配が緩くなる範囲は余り広くなく、本流および主な支流沿いでも谷は深く、谷壁は急斜面から成ることを意味する。また、山稜部についても、緩勾配の範囲は極めて狭く、稜線は瘦せている。

傾斜分布で特徴的な地域は、扇山南麓～桂川河谷にかけてである。ここでは、 $30^{\circ}\sim 40^{\circ}$ の急な山地斜面から $20^{\circ}\sim 15^{\circ}$ あるいは $15^{\circ}\sim 8^{\circ}$ の勾配に不連続的に変化する。この境界はいわゆる扇山断層に一致する。この地域は、全体として 30° 以上の傾斜地の占める範囲が狭く、調査図幅内ではやや丘陵的な性格を示す。 $8^{\circ}\sim 15^{\circ}$ の範囲は、開析の進んだ土石流起源の堆積地形面にほぼ相当する。

低地、台地についても、概して小規模であり、かつ背後からの土石流による堆積物の影響も加わって、 $3^{\circ}\sim 8^{\circ}$ 以下のような平坦な地域は狭い。 $3^{\circ}\sim 1/2^{\circ}$ の地域を図示できる範囲は、上野原付近と、鳥沢付近の段丘面上にすぎない。

(平川一臣, 吉村 稔)

V 水系・谷密度

5万分の1地形図「上野原」,「五日市」図幅の各辺を40等分して得られるメッシュの区画線を切る水流の和を4メッシュごとに集計し,それを谷密度とする。その基礎資料である水系図は上記地形図幅上の水流ならびに等高線から判読される全ての谷線を図化したものである。

主な水系パターンは,扇山山麓の地質境界以南の地域で特徴がある。すなわち,桂川,秋山川,道志川の谷は,この地質境界にほぼ平行するWSW—ENE方向を示す。また,これらに交叉するNW—SE方向の支谷も,特に秋山川・桂川間で目につく。これらの両方向の谷は,断層あるいは地質境界(第三紀層中の累層境界)に一致しており,地質構造に支配されていることを示す。

扇山山麓以北では,このような特徴は顕著ではないが,鶴川上流部のNW—SE方向の谷は鶴川断層に沿っている。

谷密度は,30前後の値を示すメッシュが多く,40を越える所が点在する。しかし,これらの場所も地形的に注目される特徴は見当たらず,周辺とかわるところがない。

谷密度が周辺よりやや小さい21~27を示すのは扇山南麓地域で,ここでは,南へ直線的に流れる水系がやや目につく。これらは,山麓の土石流地形を作った水流と,それらの未発達な水系を示している。

谷密度が極端に小さい6とか7の値を示すのは上野原の相対的に広い河成段丘地域に対応する。この他に河成段丘の発達する所では,谷密度がやや小さくなるが,上野原付近のように極端ではない。このことも河成段丘の発達は相対的に小規模であることを示している。

(平川一臣,吉村 稔)

VI 土地 利用 現 況

本図幅では中央高速道路と桂川が交錯する上野原町東部に市街地が発達している。ここは、J R中央線の新宿駅から普通電車で約1時間15分、距離にして74kmと東京に近いので、住宅等が増加し、都心のベッドタウン化が進んでいる。この他、桂川、J R中央線、国道20号線の沿線や道志川、秋山川の周辺にも小集落が形成されている。

農地については、水田はやはり各河川の周辺に多く、畑や桑園も、山の麓にも若干点在するが、大半は集落の周辺に集中している。

これら僅かな居住地域を除き、残りの大半は山林で覆われている。この山林のうち、人工の針葉樹林は、概ね居住地域から10~20kmの範囲に点在しているが面積は小さい。この他は天然の広葉樹林であり、その大部分は民有林で、山梨県他の地域に比べて県有林の占める割合は少ない。この他、僅かではあるが、南北の県境付近に東京都や横浜市の所有林があり、水源かん養保安林になっている。

資 料

コンピューター・マッピングについて

山梨県では、土地分類基本調査成果の活用を図るため、昭和61年度から地形、表層地質、土壌の3図幅の印刷についてコンピューター・マッピング方式を採用し、土地利用現況図についても、印刷業者の協力により、地図情報をコンピューターに入力しております。

“コンピューター・マッピング方式”は、「コンピューターに地図情報を入力し、入力したデータを機械が解読し、これに基づいて印刷する」という方式です。

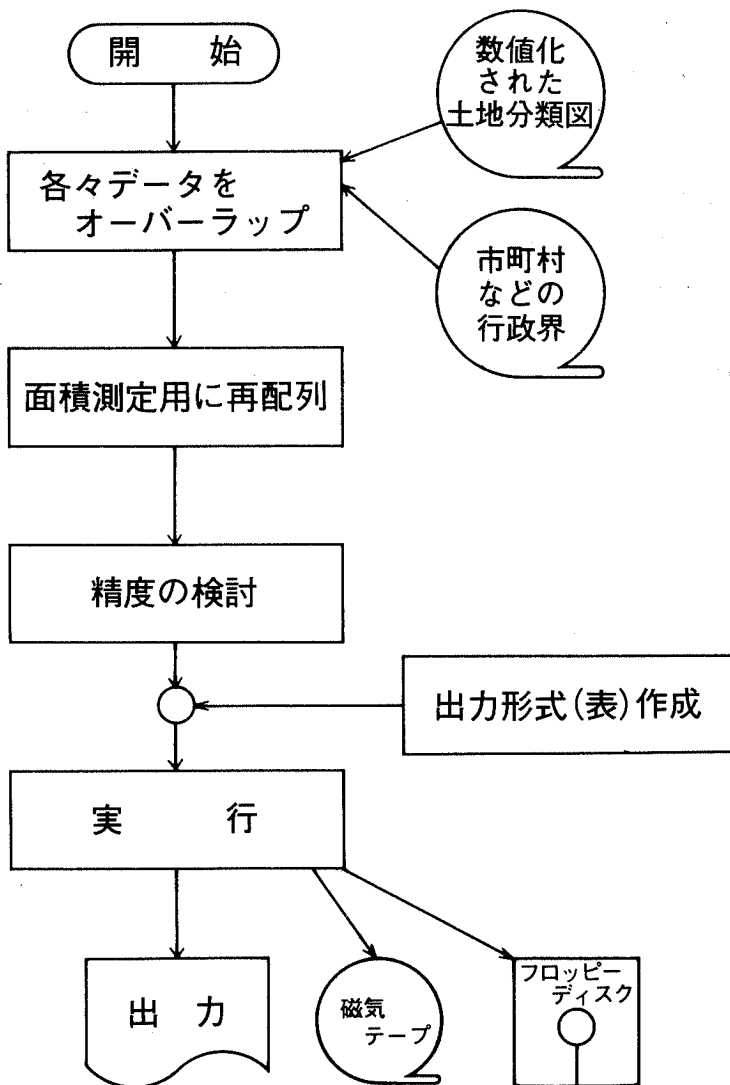
この方式により、複数の図面を重ね合わせた複合図面の作成や各凡例ごとの面積測定が可能になり、各種災害の危険地域を予測したり、利用目的ごとの開発の可能性を判断するなど、行政機関が計画を立案・検討する際に欠かせない重要な資料となります。

本年度のコンピューター・マッピング方式の成果として、地形分類図と土地利用現況図の面積測定の結果を掲載いたしました。

なお、コンピューター・マッピング方式の採用により、この土地分類基本調査の成果がさらに多くの場で活用されることを希望しております。

土地分類基本調査における面積測定について

数値化された地図情報の利活用の1つとして面積測定が上げられます。今回の面積測定は、下記の流れによって作業を実施いたしました。



作成できる面積測定表の例

- ① 1 図葉中での各凡例の面積測定
〈例1〉
- ② 1 図葉中での、市町村を単位とした各凡例の面積測定
〈例2〉, 〈例3〉, 〈例4〉, 〈例5〉

※入力されたデータ（面積測定成果）は、磁気テープ、フロッピーディスク等での保管が可能になり、従来の地図原図に比べて場所を取りません。また、成果の維持管理が容易であり、統一化した精度の図面を常時短時間で印刷することができます。

〔例-1〕

市町村面積測定結果

単位：km²

市町村名	面積
大月市	35.07
都留市	8.33
上野原町	117.94
秋山村	44.79
道志村	38.69
小菅村	2.49
合計	247.31

〔例-2〕

低地・凸形斜面・凹形斜面の面積測定結果（市町村別）

単位：ha

市町村名	低地3°～1/2°	凸形斜面	凹形斜面
大月市	16.75	0.09	5.21
都留市	0.00	0.00	0.00
上野原町	85.66	5.05	5.25
秋山村	0.00	9.53	0.00
道志村	0.00	12.85	0.00
小菅村	0.00	0.00	0.00
合計	102.41	27.52	10.46

〔例-3〕
地形分類面積測定結果（市町村別）

単位：ha

凡例名	大月市	都留市	上野原町	秋山村	道志村	小菅村	合計
山地斜面 $>40^{\circ}$	69.9	17.2	171.5	35.5	114.6	7.4	416.1
山地斜面 $30^{\circ}\sim 40^{\circ}$	1977.0	608.5	6106.5	2489.0	2179.8	214.9	13575.7
山地斜面 $15^{\circ}\sim 30^{\circ}$	927.1	175.3	3799.4	1694.1	1204.8	14.4	7815.1
山地斜面 $<15^{\circ}$	42.1	0.0	281.7	12.9	36.9	0.0	373.6
新期土石流地形	18.1	14.6	58.1	10.6	49.0	0.0	150.4
古期土石流 扇状地および堆積面	127.1	8.9	245.3	77.5	103.2	12.2	574.2
砂礫台地	208.8	0.0	615.5	52.0	48.9	0.0	925.2
谷底平野	52.7	3.9	208.0	65.1	56.9	0.0	386.6
現河床	13.1	0.0	31.5	4.3	5.3	0.0	54.2
人工改変地	0.0	0.0	12.6	0.0	0.0	0.0	12.6
道	44.7	5.0	208.1	38.0	44.8	0.0	340.6
河川・湖	26.2	0.0	55.4	0.0	25.1	0.0	106.7
合計	3506.8	833.4	11793.6	4479.0	3869.3	248.9	24731.0

(例-4)

土地利用現況図面積測定結果 (市町村別)

単位：ha

凡例名	大月市	都留市	上野原町	秋山村	道志村	小菅村	合計
人工針葉樹	693.2	214.2	2840.2	731.1	977.6	50.5	5506.8
天然 "	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8	3.8
人工広葉樹	0.0	0.0	6.6	27.8	0.0	0.0	34.4
天然 "	1859.7	356.3	5428.9	2464.0	2377.1	190.5	12676.5
普通畑	61.2	0.0	845.6	136.2	54.8	0.0	1097.8
原野	446.1	242.1	839.6	771.5	175.5	4.1	2478.9
桑園	238.6	0.0	616.5	189.7	162.8	0.0	1207.6
田	47.6	0.0	203.5	66.9	35.8	0.0	353.8
未立木地	29.3	15.8	300.1	27.4	0.0	0.0	372.6
市街地・村落	57.1	0.0	345.4	23.6	13.5	0.0	439.6
裸地・荒地	0.0	0.0	12.5	0.0	0.0	0.0	12.5
河川・湖	26.2	0.0	55.4	0.0	25.1	0.0	106.7
道路・鉄道	44.7	5.0	208.1	38.0	44.8	0.0	340.6
運動施設	0.3	0.0	78.5	0.0	0.0	0.0	78.8
公共施設・公園緑地	2.8	0.0	8.4	2.8	2.3	0.0	16.3
工場	0.0	0.0	4.3	0.0	0.0	0.0	4.3
合計	3506.8	833.4	11793.6	4479.0	3869.3	248.9	24731.0

(例-5)

単位：ha

凡例名	大月市	都留市	上野原町	秋山村	道志村	小菅村	合計
果有林	740.1	331.0	568.6	817.5	0.0	0.0	2457.2
財産区有林	10.3	0.0	314.4	0.0	0.0	0.0	324.7
水源かん養保安林	288.6	501.4	1682.2	941.3	1046.6	217.6	4677.7
土砂流出防備保安林	0.0	43.3	161.7	132.9	136.4	0.0	474.3

1988年3月 印刷発行

土地分類基本調査

上野原・五日市

編集発行 山梨県農務部農村整備課
山梨県甲府市丸の内1-6-1

印刷 内外地図株式会社
東京都千代田区神田小川町3-22